

## 日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

## 贖罪愛

## ——マルコ伝第10章35～45節——

1965年2月21日

小池辰雄

わが飲む酒杯 御霊における権威 神に仕える者 贖罪愛 我と共にパラダイスだ 十字架の  
前に降参 聖霊の愛 神の栄光の体現者 終末の実存

## 【マルコ10・35～45】

35ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に<sup>きた</sup>来りて言う『師よ、願わくは我  
らが何にても求むる所を<sup>な</sup>為したまえ』36イエス言い給う『わが汝らに何を為  
さんことを望むか』37彼ら言う『なんじの栄光の中にて、一人をその右に、  
一人をその左に坐せしめ給え』38イエス言い給う『なんじらは求むる所を知  
らず、汝等わが飲む酒杯<sup>さかずき</sup>を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』39彼  
らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我  
が受くるバプテスマを受くべし。40然れど我が右左に坐することは、我の与  
うべきものならず、ただ備えられたる人こそ与えらるるなれ』41十人の弟子  
これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、42イエス彼らを  
呼びて言いたもう『異邦人の君と認めらるる者の、その民を<sup>つかさ</sup>宰どり、大なる  
者の、民の上に権を執ること、汝らの知る所なり。43然れど汝らの中には  
然らず、<sup>しか</sup>反つて大な<sup>かえ</sup>らんと<sup>えきしや</sup>思う者は、汝らの役者となり、44頭<sup>かしら</sup>たらんと<sup>おおい</sup>思う  
者は、<sup>すべ</sup>凡ての者の<sup>しもべ</sup>僕となるべし。45人の子の<sup>きた</sup>来れるも、<sup>つか</sup>事えらるる<sup>いのち</sup>為にあらず、  
反つて事うることをなし、又おおくの人の贖償<sup>あがない</sup>として己が生命<sup>いのち</sup>を与えん為な  
り』

## ●わが飲む酒杯

35ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に<sup>きた</sup>来りて言う『師よ、願わくは我  
らが何にても求むる所を<sup>な</sup>為したまえ』36イエス言い給う『わが汝らに何を為  
さんことを望むか』37彼ら言う『なんじの栄光の中にて、一人をその右に、  
一人をその左に坐せしめ給え』38イエス言い給う『なんじらは求むる所を知  
らず、汝等わが飲む酒杯<sup>さかずき</sup>を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』39彼  
らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我



が受くるバプテスマを受くべし。<sup>40</sup>然れど我が右左に坐することは、我の与うべきものならず、ただ備えられたる人こそ与えらるるなれ』<sup>41</sup>十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、<sup>42</sup>イエス彼らを呼びて言いたもう……

あいかわらず、この弟子どもは見当外れな願いをしたり、質問をしたり、討論をしたりしている。似たようなことはこの前に出てきましたね。

「誰が天国で大きいか」

というようなことを言つて、またキリストにやられてしまった。

「おさなじ幼児の如くあれ」

ということを言われたわけです。今度も、

「誰が右と左に、右大臣と左大臣になるか」

というようなわけです。どうも、男というものは、そういう権勢的なことを好むらしい。特に30歳をこえると、そういった権勢欲というやつが出てくる。これが非常に危ないわけです。そうすると、他の十人が、

「ヤコブとヨハネはけしからん」

というようなわけで、これがまた争つて、憤つてどうのこうのと。

<sup>38</sup>イエス言い給う『なんじらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯さかずきを飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』

「わが飲む酒杯」とは殺害のことです。

「我が受くるバプテスマ」

とは十字架のことです。ヤコブもヨハネも、他の外典によると、両方とも殉教の死をとげたことになっています。キリストが預言された通りになってしまった。ペテロもそうですが、パウロもみな、使徒たちはみなやはり最後は迫害を受けて殉教の死をとげた。だから、

<sup>39</sup>彼らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、ま

た我が受くるバプテスマを受くべし。

「受けることになるぞ」

とキリストは言われた。しかしとにかく、この時は、彼らは見当違いなことをした。なぜ、そういった見当違いなことを言うか、問題にするかといえ、もう申すまでもなく、聖霊が来てないからです。

### ●御霊における権威

聖霊ということはやつとこの頃、キリスト新聞なんかを見ても、

「キリスト教界で聖霊のことが今まで非常におろそかであった。これから真剣に聖霊のことを研究しなくてはいいかん」



と——相変わらず「研究」なんていうことを言っている——聖霊の研究ということが課題になって、かなり組織的にやるらしい。まあ、研究もいいでしょう。けれども、聖霊のことはいくら研究しても——聖霊に限りませんけれども——福音の世界はどこまでも、身につけなければ、体験しなければどうにもならない世界です。どんなに聖書研究をやり、神学研究をやっても、この使徒的な質、預言者的な質には来れない。これははっきりしている。私たちがねらっているところの、またそこにおいて告白しているところの事態は、正直、本当の正道を行きつつある。何のかんと言っても、私たちは本当の道を進ましめられてあるという、皆さんは、御霊における本当の権威と自覚は十分もっていただきたいと思うわけです。それだけ、皆さん一人ひとりの使命は重大です。どんなによつてたかつて、どうのこうのと言っても、人ひとりの本当の聖霊の人にはかなわないんです。それだけ、福音の世界ははっきりしています。

キリストは、彼らがこの

### 「受くべきバプテスマ」

を受ける角度になってこなければ、求むべきところを求め得ないということを知っていらつしやる。彼らがペンテコステを通つて、聖霊降臨を受けてから、ガラリとこの使徒たちは変わった。直々にイエス・キリストに接し、その言葉を聞き、その目と目をもつて相交わつていた直々の世界で、イエス・キリストが分からない。そこに雲がかかっている。けれども、イエスが天界に行かれてから、この煙幕が破られた。それは即ち、聖霊の光がそれを貫いて、彼らに——パウロもそうです、

### 「我が眼より鱗の如きもの落ちたり」

と言うときに——本当に聖霊の貫きが来たわけです。

いわゆるクリスチャンは、レッテル・クリスチャンというようなことであるならば、いくら一応良きそうにみえても、実はそれは本もののところにはまだ到達していない。しかし、どんなに学問がなからうが何であろうが、本当に御霊を受けたクリスチャンは、どんな大学者よりもこのキリストに近い。

この問答の鍵はどこにあるか。結局、聖霊を受けていないから、福音書のいたるところにおいて、彼らは聖霊の人たちではないということが暴露されている。福音書の尊さというものは、福音書においてキリストにぶつかることです。使徒たちのこの躓き転びにおいて、いかに聖霊なき世界はかくのごときであるかということを、福音書によつてまた知らなければならぬ。パウロの書簡になると、これはもう聖霊の世界ですから、そういうものは出てこない。使徒行伝も、聖霊の貫きをもつて、光が闇に勝っている世界です。福音書においては、キリストの他はみな闇なんです。キリストだけが光であつて、闇の世界にいかにかこの光が歩いているかという所ですので、福音書においては、このキリストを、また光と闇がいかに違うかということを、この一点においてははっきりと見ていかなければならぬ



いわけです。

### ●神に仕える者

42 イエス彼らと呼ばて言いたもう『異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰<sup>つかさ</sup>どり、大なる者の、民の上に権を執<sup>と</sup>ること、汝らの知る所なり。』<sup>43</sup>然れど汝らの中には然らず、反<sup>かえ</sup>つて大ならんと思う者は、汝らの役者<sup>えきしや</sup>となり、<sup>44</sup>頭<sup>かしら</sup>たらんと思う者は、凡<sup>すべ</sup>ての者の僕<sup>しもべ</sup>となるべし。  
「役者」<sup>えきしや</sup>「僕」<sup>しもべ</sup>

という言葉が出ている。「ディアコノス」というのがこの「役者」という字で、「僕」の方は「ドウーロス」という字です。「ディアコノス」や「ドウーロス」になれという。要するに

### 「仕える者」

ということです。「罪の奴隷」という言葉があるが、罪の奴隷ではない。神に仕える者、また本当にその意味において、人に仕える者です。

45 人の子の来<sup>きた</sup>れるも、事<sup>つか</sup>えらるる為にあらず、反<sup>かえ</sup>つて事<sup>つか</sup>うることをなし、これも「ディアコネオー」という字が使つてある。

又おおくの人の贖<sup>あがない</sup>償<sup>い</sup>として己<sup>いのち</sup>が生命<sup>いのち</sup>を与えん為なり』  
「贖償」<sup>あがない</sup>

という言葉は「リュトロン」という、もとは

### 「身の代金」<sup>しろうきん</sup>

のことを意味した言葉です。

「多くの人に代わつて身の代金を払う者」

というようなわけです。よく、罪の赦しのことも、

### 「負債を払う」

というようない方を――主の祈りの中にもあります――金銭関係の言葉を使っているけれども、もちろん、内容はそういう金銭のことではない。

### 「己が生命」

という字は、この場合は「プシヘ」という字で、「魂」という字と同じです。この生命を与えるためであるという。

### ●贖罪愛

今日は、「贖罪愛」という題を出したわけです。しかし、福音書の中でも、贖罪ということをキリストがはつきり言われているところはそう多くはない。ここでは、

「おおくの人の贖<sup>あがない</sup>償<sup>い</sup>として己<sup>いのち</sup>が生命<sup>いのち</sup>を与えん為なり」

という。しかも、それは





## 「人の子」

というような、三人称的な言い方で、「私は」とは仰っていない。

贖罪のことは、アブラハムの有名な「イサクの献供」から既に出発して、旧約聖書からいろいろな事実を通して——厳密な意味における贖罪という言葉はイエス・キリストの他には使われてはならないわけですが——

「人の代わりに自分の生命を捨てる」

という角度の、そういった贖罪的な角度の事態は、既にひながたにおいて始まっている。旧約聖書の宗教そのものが、動物であるけれども

「当歳の小羊を屠<sup>ほふ</sup>つて罪の贖いとする」

ということが、旧約聖書の宗教の、祭司的な宗教の型ですから。その型を本当の實質にしてみましたのがイエス・キリストであつた。申すまでもなく、ヘブル書はそのために書かれてあるような偉大な書簡です。

「ヘブル人に与えた今までの贖罪とは違う。イエス・キリストの贖罪は動物の贖罪とは違う。旧約の宗教はここですっかり完全に満たされた。完全なかたちで内実をもつて満たされた。」

ということを徹底的に語っているのがヘブル書です。皆さんは、贖罪のことなら、このヘブル書をよくごらんになつてください。またローマ書もそうですけれども。

「執成<sup>とりな</sup>しの祈り」はドイツ語で「フュールビッテ」(Fürbitt)と言います。モーセが執成しの祈りをしています。出エジプト記32章30節から、

「<sup>30</sup>明日モーセ民に言いけるは汝らは大なる罪を犯せり。今我エホバの許<sup>のぼ</sup>に上

りゆかんとす。我なんじらの罪を贖うを得ることもあらん。

ここにちゃんと「贖罪」という言葉がある。

<sup>31</sup>モーセすなわちエホバに帰りて言いけるは、嗚呼<sup>ああ</sup>この民の罪は大なる罪なり。彼等は自己<sup>おのれ</sup>のために金の神を作れり。

「金の牛」を造つて、金の牛を拝んだという馬鹿らしい話です。

<sup>32</sup>然れどかなわば彼等の罪を赦したまへ。然らずば願<sup>ねが</sup>くは汝の書きしるしたまへる書の中より吾名<sup>わがな</sup>を抹<sup>けし</sup>さりたまへ。」(出エジプト32・30～32)

という。即ちこれがモーセの執成<sup>とりな</sup>しの祈りです。

キリストは私たちの全てのマイナスを引き受けて、そして、私たちに逆にプラスをくださっている。絶対恩寵<sup>あふれ</sup>というこのプラスをくださる。愛にもいろいろありますけれども、贖罪的な愛は最高の愛です。また、人間の世界で最も力強いところのものはこの贖罪<sup>あ</sup>の愛の力です。これだけが本当にこの世界の歴史を背負っている。世界の歴史を背負っているところの一番底の力は贖罪的な愛です。これが神の国を来たらしめるところの一番の源流である。私たちの生活の質、心の質というものはこのキリストの贖罪愛である。



私たちは、キリストの意味において、人の罪を贖うことはできません。しかし、人のために背負っていく。ゲートルが、

「他の人たちのための恵みある業<sup>わざ</sup>」

ということを言っているが、恵みある業の極点はこの贖罪の愛の業です。ゲートルの『ファウスト』の終りの方で、執成しをしている人たちはこの贖罪の愛の角度から祈っている。これはみんな女性です。ダンテにしろ、ゲートルにしろ、そういった贖罪愛的な女性によって、彼らの魂は清められ高められて行った。

大体、人の世界を見ると、悪い事をするやつは男の方が圧倒的に多い。犯罪者は大部分、男です。女性が男性を執成して、その魂を高め清めていくという役割をもっている。期せずして、ダンテもゲートルもそういった角度から、女性の魂を描いています。

しかし、人間いかなる人も人の罪を本当に贖いとすることはできない。このことにおいては、イエス・キリストの十字架は絶対に質のちがった特別な贖罪の十字架であって、天才の殉教的な死ではない。

### ●我と共にパラダイスだ

45 ……おおくの人の贖<sup>あがない</sup>償として己<sup>いのち</sup>が生命を与えん為なり

「おおくの人」と書いてあるけれども、これは「すべての人」です。すべての人ですけれども、しかし、なかなかこれが受け付けない。キリストの霊的な贖罪愛に逆らう。

「そんなことがあるか」

なんてなわけ。これはどうにもならん。それはもう自分で地獄へ行くよりか仕方がない。もちろん、天国に行くひとたちは、キリストの贖罪愛を自覚して受けとった人ばかりではない。「キリスト」の「キ」の字も知らない人も天国へ行きます。キリストの贖罪愛をいくら知っていても、これはどっこい天国へ行けない場合もある。どういう人が天国に行かれるかは誰も分からん。その一人ひとりを神さまは見えて、

「お前は天国行き」

「お前はちよつと待て」

「お前は直ちに地獄へ行け」

とか、いろいろあるだろうと思います。

とにかく、地上における実存の総決算をなしうるものは神さまだけです。それは普通の計算には合わない。キリストの十字架の横の片一方の盗賊は——悪いことをして、殺人や強盗をやったらしい二人の盗賊がいた——ほとんどマイナス99という生涯を送ってきて、ところが最後の瞬間に、

「私は悪かった。どうか、せめても、あなたが御国にいらっしゃるときに、この悪いやつでも、名前を覚えていただきたい」



と言った。そしたら、キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイスだ！」

と仰った。マイナス99が、その砕けた魂が直ちに天界に進む。

「それでは、私は一生悪いことをして、最後に悔改めようか」

なんていうのはダメです、そういう計画的なのは。それは神さまはよく知っていていらつしやる。私たちの心の中は、詩篇139篇にあるとおりです。

(註：第139篇。1 エホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへり 2 なんぢはわが坐るをも立をもしり 又とほくよりわが念をわきまへたまふ 3 なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐり いだしわがもろもろの途をことごとく知たまへり 4 そはわが舌に一言ありとも觀よエホバよなんぢのことごとく知たまふ……)

### ●十字架の前に降参

誰も人が人を品定めすることはできません。しかし、私たちはこの福音に接して、主のこの贖罪の驚くべき十字架の愛で現に、

「我を受けとる者は死ぬとも生きる」

と、一切の罪は赦されてある。これを本当に受けて、もう神の前に、キリストの前にぶつつぶれる。キリストの十字架だけが私たちを本当に砕けの魂にする。一時的には、魂は砕けたって、そんなものは大したことはない。我々の本当の悔改めという魂の方向転換は、十字架の前に本当に降参する人か、十字架の前に降参しないか、そのどちらかです。

「分かる、分からない」

の問題ではない。十字架ということが分かったって、研究したってどうにもならん。

その前に本当にぶつつぶれる人は、その人には今度は聖霊がくる。キリストの生命の、義の、愛の、光の霊が私たちの中に臨んでくださる。この御霊におけるところの——何と言いましようかね、確信というか、力というか、豊かさというか、何というか——もう、自分はずれた或るものです。自分があるところには、御霊は本当に内住しない。自己がはずれた、自我というやつがはずれた或るもの。

「新しい我」

と言ったつていい。けれども、私はもう「我」ということは言いたくない。とにかく、しかし、それは某<sup>ぼうばく</sup>漠たる何者かではない。はつきりした、それは我ですよ。

「天上天下唯我独尊」

というけれども、あの「独尊」の「独」の字は本当に宇宙的な大我の我です。お釈迦さんの自覚も、決して自分を立てているわけではない。

「この我がうちに来たり給うところの御霊のキリストをいかんせん」

という自覚です。これは自己を立てる角度とおおよそ違う。御霊を本当に受けとれば、人



のために執成さざるを得なくなってくるわけです。パウロが、  
「<sup>はらから</sup>同胞のためには、もしキリストに捨てられてもいいよ」  
と言う。それほど驚くべき、同胞のための熱愛というものは、キリストから来ているところの聖霊の愛です。

### ●聖霊の愛

光は回りを照らさないではいけない。泉は溢れて流れないではいけない。聖霊の愛はそのように祈らないではいけない。働かないではいけないところのものです。もし、それが何か沈滞したようなことであるならば、それは本当に聖霊の愛を受けていない。

聖霊の愛というものは、十字架というものは、常にこれは祈りの世界においてこそ本当に受けとられていく。キリスト者は祈りをぬかしてしまったら、いかなる善きことも出てこない。神さまとの交わりが祈りですから。キリストとの交わりが祈りですから。キリストとの交わりの祈りの世界で、

「キリストの中に」

という、

「我キリストの中に、<sup>うち</sup>キリストわがうちに」

という、この切つても切れないところの世界が展開してくれば、それがキリストならばキリストは働かないではいけない。キリストの霊は他人のために祈らないではいけない。そして、必ずそれは聞かれていく。

必ずその祈りは聞かれていく。必要な人にでつくわさせてくださる。クリスチャンの本当の生命は、そういった生き方をしているかしていないかで決まるので、その人がいわゆる立派であるとか何とかというのではない。

無教会は、自分の聖書研究、ギリシヤ語やヘブライ語、聖書の勉強、そんなことばかりで、何か象牙の塔の中の聖書いじくりになってしまったら、そして、とにかく何年も通って日曜にしずつと来てしずつと帰って行く、そんなことでもあるならば、それではダメですよ。どうか、皆さんは、何かしらんけれども、生命の溢れたことであってもらいたい。クリスチャンは、まじめな方はみな、御霊の世界に或る程度は触れています。決して人は人のことをどうのこうの言うのではありません。けれども、

「もうこれでなければ」

と言って本当に胸襟を開いていける——本当に胸襟が開けるんですよ、この御霊の世界にくると——そういうキリスト者が、日本のいわゆる「日キ」とか何とかいうご連中の中に、もつともつと起きていかなければ。学者はたくさんいます。けれどもそれでは仕方がない。





## ● 神の栄光の体現者

今のはモーセの場合でしたが、イザヤ書43章を見ると、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此<sup>かく</sup>いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有<sup>もの</sup>なり。」(イザヤ43・1)

とある。神さまが私たちを、キリストが私たちの名を呼んでおられる。そして、

「何も恐いことはない。自分の罪も何も心配するな。私はお前を完全に贖った。汝はわがものである」

と。そして、そのように「神のもの」とされた者は、また私たちは、人をそういった同じ恵みの中に入れさせようという本当の悲願が湧いてくる。湧かざるを得ないわけです、本当に神のものとなったならば。神のものとなって、ノホホンなんていうことはありえない。それがもしそうであるならば、それは間違った神秘主義です。それは本当の贖罪も、本当の聖霊も受けていない。いわゆる神人合一ということはありますよ。宗教的な現象というものはいろんなものがある。けれども、このキリストの贖罪愛というものを本当に受けとって、御霊が来た世界はそれとは違う。取り澄ました世界ではない。己独り聖<sup>きよ</sup>しとしている世界ではない。

こないだ申し上げた、和光<sup>わくこう</sup>同塵<sup>どうじん</sup>として。本当に光を和らげ、同じ塵となつて、喜びを喜び、悲しみを悲しみとして、それを全部本当の喜びに変えてしまう。全部、悲しみを喜びに変えるという。イザヤ書61章3節にあるように、

「灰にかえ冠<sup>あたま</sup>をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀<sup>かなしみ</sup>にかえ<sup>よろこび</sup>喜びのあぶらを予え、うれしいの心にかえて讚美<sup>さんび</sup>の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹<sup>き</sup>エホバの植えたもう者その栄光をあらわす者となえられん。」(イザヤ61・3)

「<sup>き</sup>喜びのあぶら」というのは聖霊のことです。

我々の肉体の欠陥なんていうものは五十歩百歩で、みんなどうせ、或る時がくれば自分の身体にサヨナラしなくてはならない。我々は自分の身体にサヨナラするんですが、その奥に聖霊は新しい衣を着せて、霊体をつけられて次の世界に進んでいく。御霊の信仰は観念しているのではない。そういった実質を事実もっている。療養所の方々がこれを受けると、何かしらん力を得て起き上がってくるといううなわけです。すること為<sup>な</sup>すこと、またいかなる欠陥にしろ、神さまは必要な時に必要なようにしてくださる。即ち、

「その栄光をあらわす者となえられん」

と、その少し後に書いてある。栄光を現す者。神の栄光の体現者。栄光の体現者というのは何も、人に示して威張るのではない。栄光を体現して、その同じ栄光を人に分かち与えなくてはいいかん。それが本当の体現の意味です。これが本当の僕です。



そういった自由者というもの。「僕」とか「役者<sup>えきしや</sup>」というのは何かというと、人にそういった恵みを与える者ということです。人に恵みを与える。

「奉仕」「人に仕える」

と言うと、何か気分が余りおもしろくないように感ずるような言葉ですけれども、そうじゃない。相手に分かち与えてやまざるところの者、相手を担ってやまざるところの者、それが本当の僕である。本当の役者である。

「我は福音の役者。我はイエス・キリストの僕」

とパウロが言ったのはそのことです。

僕ほど、役者ほど豊かな人はいませんよ。

「私は持っている」

なんて言って威張っているのはひとつも豊かではない。何もない者が実は、無限なものを与えるものを持っている。跛者に、

「金銀は我になし。イエス・キリストの御名によりて立て」

と言ったのがペテロである。ペテロに限らず、使徒たちは、本当のキリスト者は無一物無尽蔵にもっている。「もっている」ということは、ただもっているのではない。無尽蔵に与えるんだ。この贖罪愛の実体はもの凄い力をもっている。その力は人を倒すのではなくて、人を助け担う。もの凄い豊かな生命をもっている。それは限りなく与える生命である。その力は担う力であり、与える生命である。それが即ち、贖罪愛の人の実体である。

それはイエス・キリストを頂かなければ、出てこない。イエス・キリストを頂く、受けとることです。「信ずる」なんて、イエス・キリストは神の子である事を信じてみたり、私たちの罪を贖ってくださったという事柄を信じてみたら、どうにもならん。事実受けとっていないければ。だから、私はこの「信ずる」という言葉は、そういう意味ではあまり好きではない。受けとることです。受けて、授受する人だ。神から受けて、人に授ける人が授受者だ。これが即ち、本当にキリストの贖罪愛を頂いたところの人である。

「信仰によって義とされる」

「キリストの十字架の贖いを信ずることによって義とされる」

といって、自分が義となつてそれでいい気になつていような、ヘタするとそういった觀念クリスチャンが多くて困る。そういうのは必ずパリサイになる。

私は無教会に育ったから、あれは嫌いなんだよな。

「信仰によって義とされる」

なんて言つてね、ギンギンしちゃうから（笑）。ダメですよ、そんなのは。藤井武先生も「義」という言葉が好きだったね。けれども、申し上げているとおり、義というのは「羊の我」なんだから。「羊の我」というのは本当は、この贖罪愛のキリストの羔<sup>こひつじ</sup>のことです。

皆さん、この福音は何とも言えないでしょ。女の方々は、さつきダンテやゲーテの話を



したけれども、実は天国では非常に大事なところに置かれますよ。そういう執成しをしている。男というのは悪いやつが多いから。そういった女性の執成しの愛というものがいかにこの世の中に、実は平和をもたらしているものであるかということです。これは男ばかりだったら、喧嘩ばかりしてしょうがない。

### ●終末の実存

どう考えても、イエス・キリストの十字架によって、細々ながら世界の平和は保っています。しかし、この十字架の愛に逆らってやっていけば、どんなことにならないとも限らない。バカなもんですよ、正直。国際会議とか何とか、連盟とか言いましても、みんな誤魔化しばかりです。いかに人間の世界の一切の事柄が、実は魂の問題に帰するか。そして、魂の問題の最後の解決はキリストの十字架というところに焦点し、そして、十字架の背後から来るところの、この驚くべき贖罪愛的な担いの力あるところのこの愛が、執成しであり担いの愛が、これが実は世界歴史を本当に進展させていくところの、神の国を来たらしめるところの終末的な事態である。終末の実存、というものは、そういった人たちによって本当に証しされていかなければならない。

藤井武先生の「羔の婚姻」という偉大な詩がある。そのような人たちによって担われ待たれている。どうか、結果がどのようなであつても、そのような生き方をするとところに、実は一番喜びと力と希望と生命がある。キリストがここで言われた

#### 「僕となれ、役者となれ」

と言われたことは、これが本当の特権なんです。神の国の人の特権は、この「僕」であり「役者」である。本当の力のある者でなければ、僕となれない。本当の愛の人でなければ役者とはなれない。

そういうことから、どうか、皆さん、この集会というものも、そのように生き生きとしてどしどし伝道の面もやってください。ただ集会をして伝道をする事だけが伝道ではない。ポケットに紙切れ（チラシ）を入れて、

#### 「どうですか」

と、何か困っている人、苦しんでいる人にその道をその時に示されて与えるということ。なにも、街頭でそこらを歩いている大衆に向かってやる必要はない。そんなのはみんな、二三步あるけば、すぐ紙くずにして捨ててしまうようなやつには勿体ないからね。「豚に真珠」だから。そんなことはする必要はない。けれども、時あつてか、そういった人たちに与える機会がある。それだけの備えは、心は、私たちはやはり持って、どういう形でもそういうことは自由自在に自発的にやっていただきたいと思いますと思うわけです。

